

## ITP 派遣報告書

【所属・氏名】 東京外国語大学大学院 地域文化研究科 澤井志保

【派遣先機関】 ①中国・香港中文大学 ②シンガポール国立大学

【受入教員名】 ①リン・ナカノ准教授 ②ブレンダ・ヨー教授

【派遣期間】 ①2008年10月2日－2009年3月30日

②2009年4月1日－6月30日

【研究テーマ】在香港インドネシア人女性家事労働者の文学活動についての研究

【具体的成果】

当研究は、「他の多くの国にも多数存在するインドネシア人女性家事労働者の中で、香港に住むインドネシア人女性家事労働者だけが、なぜ文学活動に活発に従事しているのか？」という問いに答えるために、在香港インドネシア人女性家事労働者による代表的なイスラム系文学活動グループである、ペン・サークル・フォーラム香港(以下 FLP 香港)という文学愛好者グループに焦点を当てて調査し、

### I. 香港とインドネシアにおける社会的背景

### II. FLP 香港メンバーの行う文学活動の内容と、彼女らにとっての文学活動の意味

について考察した。このような問題系に回答するために、当研究は、

- ① FLP 香港の定例ミーティングでの参与観察
- ② FLP 香港メンバーや関係者への個別聞き取り調査
- ③ グローバル化するアジア移民家事労働者の問題における香港社会の位置づけを理解するための英語の文献収集と分析

などの手法を使用し、研究を行った。この調査により、I.については、

- A. 香港においては移民家事労働者の社会的権利が他国に比べて手厚く保障されていることにより、インドネシア人家事労働者による休日における社会活動が活発に行われていること
- B. インドネシアにおける近年の社会的自由の拡大に伴う(イスラム系)出版産業の拡大に連動するかたちで、非都市部における読書・文筆人口が増加していることにより、移民家事労働者という、以前であれば著作・出版活動に対して興味を持つことがまずありえなかった社会層が、出版のチャンスを得ることになった
- C. 香港とインドネシア両方での携帯電話・インターネットの使用の普及により、インドネシア人女性家事労働者が香港での同胞やインドネシアの出版社などと迅速にコミュニケーションをとることが可能になり、文学活動を促進している

などの要素が影響していることが明らかになった。II.については、外国人・女性・家事労働者・イスラム教徒という多重のマイノリティ性を持つインドネシア人女性家事労働者が、香港社会において少しでもより望ましいアイデンティティを獲得するための「場」として文学を利用していることがわかった。たとえば、FLP 香港に参加することで、メンバーたちは、文学的知識を得る相互学習の場を得たり、文学イベントの開催によってグループの活動資金を得たり、また、イスラム教徒としての

宗教実践を集団的に行う場をも得ている。この意味では、文学実践という、一般的には読むことと書くことに限定して理解されがちな活動が、実は実践者の置かれた社会的状況に直結した多様な目的に有効利用され、彼女らの社会エンパワーメントに役立っていることをこの調査は明らかにした。しかしその一方で、彼女らの書いたテキストには、多重的マイノリティとして彼女らがうける社会的差別や、他の社会グループとの文化的コンフリクトなどが描かれていることから、彼女らの文学活動が、移民によって生じるポジティブな面（インドネシア人ムスリム女性どうしであつたり、文学活動を行うなどして自己エンパワーメントを行うこと）とネガティブな面（移民することにより、国籍・エスニシティ・宗教・職業・ジェンダーなどの面で差別を受ける）の両方を内包する、両義的な周縁性と不可分であるということがわかった。

補足として、香港滞在中、研究の合間を利用して、雇用者とのトラブルに巻き込まれたインドネシア人家事労働者のためのシェルターでボランティア活動をする機会を得た。この中で、このシェルターのスタッフと共同で、シェルター入居者に対して、文筆ワークショップをおこなった。このワークショップは、シェルターにおける夜の自由時間を利用し、希望者を対象に、簡単な文章練習を行った後、自分のこれまでの人生を題材に、自由なトピックでショート・ストーリーを執筆し、一人ずつ作品を参加者の前で音読してから、内容について議論するという方法で行った。このワークショップの開催により、書く力が一般的に低いと思っていた研究者自身の思いこみとは違い、簡素な表現であっても、参加者が、非常に豊かな経験や感情を書く力を持っていること、また、自分について書くということが、雇用者等から精神的・肉体的暴力を受けた移民女性家事労働者の心の傷をとらえなおしたり、インドネシアでの自分の人生（家族との関係など）について再評価するような、自己エンパワーメントの機会になりえるのだということが明らかになった。もちろん、このような実践は、当初の研究計画の枠を超えたものであり、実施の規模等から考えても、すぐに結果を一般化できるような性質のものではない。しかしながら、今回の実験的な試みの結果から、心にトラウマを抱える女性たちの自己エンパワーメントの道具として、文学実践の可能性が提起された。これについても今後、新たな研究課題を探求したいと考えている。

研究成果については、香港・シンガポール滞在中にそれぞれ派遣先の大学で発表を行い、現地の学生や研究者からのフィードバックを得たことで、自己の研究を逐次見つめなおし、修正するよい機会となった。発表する場所や聴衆の違いで、まったく違った反応を得ることは興味深かった。また、現地での発表を通して、当研究について興味を持ってくれる研究者が現れ、その方たちが編集担当になっている学術雑誌への寄稿を勧められ、掲載される予定であるという意味で、派遣先の国で積極的に発表したことが、研究内容の出版という次のステップにつながった。

さらに、派遣中、非常に多くの女性の研究者・学生から、さまざまなかたちで支援を受けたことが非常に鮮明な印象として残っている。私が支援を受けたのは、主に私とほぼ同世代の30-40代の若手の方々であり、友人として、研究のための助言をいただいたり、現地でコンタクトを取るのが有効であると思われる人に紹介していただいたり、また時には同僚として、出版や国際会議参加へのチャンスをいただいたりした。このような経験は、翻って、なぜ日本では、このように女性同士が助け合ったり、積極的に共同研究などを立ち上げていくことがあまりないのかという問いにな

り、改めて日本の学界について再評価し、将来、私たちの世代がどのような未来を実現させていくべきなのかについて考えるきっかけを研究者に与えてくれたという意味で、示唆に富むものであった。

#### <研究発表リスト>

2009年8月28日「曖昧な周縁性：香港におけるインドネシア人ムスリム家事労働者の文学活動の事例から」オランダ・ライデン大学 CAAS アジア・アフリカ研究コンソーシアム国際会議：宗教・アイデンティティ・権力（発表言語：英語）

2009年8月9日、「香港におけるインドネシア人家事労働者の文学活動」International Conference of Asia Scholars (ICAS)6：韓国デジュン・コンベンション・センター（発表言語：英語）

2009年4月29日、「曖昧な周縁性：香港におけるインドネシア人家事労働者の文学活動の事例から」シンガポール国立大学アジア研究所カルチュラル・スタディーズ・リサーチ・クラスタ（発表言語：英語）

2009年4月17日、「曖昧な周縁性：香港におけるインドネシア人家事労働者の文学活動の事例から」シンガポール国立大学人文社会科学部アジア移民研究クラスタ大学院セミナー（発表言語：英語）

2009年1月22日「テレオポイエーシスの可能性：香港におけるインドネシア人家事労働者文学活動と多重的周縁性」香港中文大学ジェンダースタディーズ・プログラム水曜ジェンダーセミナー（発表言語：英語）

#### <出版予定リスト>

Inter-Asia Cultural Studies Reader (Taylor and Francis)（研究結果についての単著論文）

Asian Journal of Social Science (NUS Press)（研究結果についての単著論文）

Proceedings of CAAS Conference (東京外国語大学) [上記 CAAS 国際会議の発表論文集]

Proceedings of ICAS6 (ICAS6) [ 上記 ICAS6国際会議の発表論文集]

The Journal of Southeast Asian Studies (NUS Press)（書評）

#### 【今後の課題・問題点等】

香港での現地調査の中で一番残念であったのは、研究対象の FLP 香港メンバーが多忙なせいで、彼女らにまとまった個別インタビューの時間をいただくのが非常に難しく、全員に個別インタビューができなかったことである。これは、香港の外国人家事労働者が、法律により、週1回休日を与えられることが規定されているが、この週一日の休日（通常は日曜日）に、彼女らは、家族への送金、次週1週間分の買い物、友人との情報交換、モスクでの礼拝など、非常に多くの用事をこなさなければいけないためである。そのため、個別インタビューが困難であった分は、参与観察の中で個別に質問してみたり、質問シートを作って、特定事項についてアンケートを行うなどの方法での差し替えを行ったが、このような状況のために、データ収集の質と量が限られる面があった。

また、この研究は、彼女らが移民家事労働者女性として経験する香港・インドネシア社会での差別と不可分であったが、これについても、たった6ヶ月間、週に一日を共に過ごしただけの人間関係では、彼女らが研究者に対してどこまで心を開いて話してくれていたか心もとない。また、研究者の社会的立ち位置(日本人、非ムスリム、知識層)をどのように乗り越え、インドネシア人ムスリムの家事労働者と共に受け入れ合うかという問題は、香港滞在中から現在まで、いまだ考え続けている問題である。

将来に向けての課題としては、3点ある。まず、FLP 香港におけるイスラームという要素の意味をさらに深く掘り下げて考えたい。これは、研究者が香港滞在中に、現地でのインドネシア人女性の多くが、イスラームを自己アイデンティティとして表現する場面に多くであったためである。そこで、現在の香港において活動中の、非イスラーム系の文学愛好者グループについてFLP 香港との比較を行うことで、イスラームという要素が、インドネシア人家事労働者の文学活動においてどのような意味を付与されているかという点をさらに深く追求したい。2点目としては、FLP 香港の中で、インドネシアに帰国したメンバーが、どの程度継続的に文学活動を行っているかを追跡調査し、香港での自己エンパワーメントとしての文学の役割を、帰国後の彼女らの人生にどうつなげられるかという問題にも取り組みたい。3点目は、トランスナショナル化するインドネシア語文学の流れをつかむという文脈で、海外支部としてのFLP 香港と、ジャカルタにあるFLP 本部との関係についてさらに深く追求してみたいと考えている。